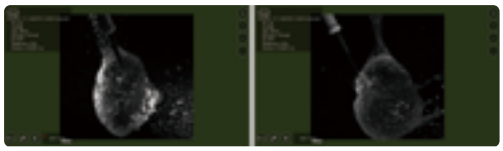
FCG LABO

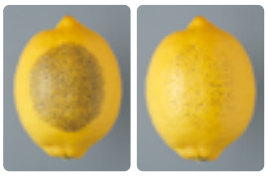
vol. 29
2022

暮らしの科学部 特集号



生活科学研究室

○広告表示に必須　空気清浄機の試験を実施します
○見えない世界に性能の秘密あり
規格試験では分からない空気清浄機の性能を見極める



美容・健康・料理研究室

○商品の実力、見える化します！
～化粧品・美容機器の性能評価～
○産経新聞料理制作のノウハウを生かします

IPM研究室

○除菌・抗菌アイテムなどの性能評価
～IPM研究室のご案内　細菌・カビ・ウイルスの除去評価～
○JEM1467 附属書E「室内付着ウイルスに対する抑制性能評価試験」の実践例 ―殺菌灯の場合―

FCG Research Institute, Inc.
株式会社 エフシージー総合研究所

広告表示に必須 空気清浄機の試験を実施します

暮らしの科学部　生活科学研究室　山田 雄太
暮らしの科学部　生活科学研究室　前田 理佳

感染症の流行により、需要が増えている空気清浄機をはじめ、さまざまな製品の評価依頼に対応しています。

国内外から数多くの依頼実績あり

当研究室では、日本電機工業会の規格（JEM1467家庭用空気清浄機）に準拠し、空気清浄機の評価試験を随時、承っています。脱臭、集じん、PM2.5除去性能、フィルターの耐久性評価が可能ですので、ぜひ、お気軽にお問い合わせください。

規格以外のオリジナル試験もご提案

評価する規格基準がない場合、試験方法を立案し、ご提案します。今回、新たに導入したのが「気流の可視化システム」。煙にレーザー光を照射し、空気の流れを可視化することができます。次項以降にその他の試験例を掲載していますので、あわせてご参照ください。

なぜ評価試験が必要なのか 景品表示法からみる試験の重要性

景品表示法とは、客観的な裏付けをもとに、事業者が、一般消費者に適切な商品情報を伝えることを義務づけた法律です。

例えば、チラシやパンフレットなどの販促媒体に空気清浄機の脱臭・集じん効果を記載する場合、それを裏付ける客観的な試験データが必須です。

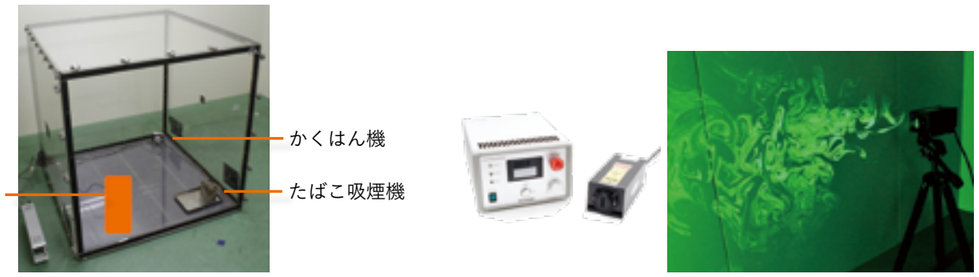
昨今では、訴求内容における根拠資料が不十分ということで、景品表示法に抵触し、行政処分を受ける事例が少なくありません。仮に処分を受けた場合、社名が公表される他、場合によっては金銭的な罰則を受けるリスクもあります。

この機会に第三者機関にて試験し、根拠資料を備えておくことで、リスクマネジメントの見直しを図ってみてはいかがでしょうか。

“取説”依頼もサンプルがあればOK

また、当研究室ではこのような製品性能評価の知見を生かし、取扱説明書をはじめ実験データを活用したパンフレット等各種販促物の制作を手掛けています。

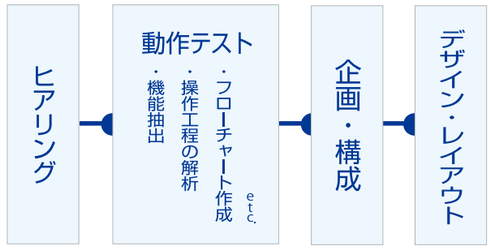
使う人の立場に立ち、必要な情報を分かりやすく伝える技術は、長年にわたり扶桑社『ESSE』掲載の商品評価に携わった実績がベースとなっています。



空気清浄機試験（脱臭）や気流の可視化の様子

最大の強みは、製品があれば取扱説明書ができること。一般的なマニュアル制作では、発注時に必要な仕様書などの資料が揃っていない場合でも、当研究室では提供された製品サンプルを実際に動かすことで対応しています。

クライアントにヒアリングを行ったうえで、まずは研究員がサンプル品を使って動作テストを行います。製品の機能や操作工程を確認し、記載すべき内容を抽出。適切な構成と表現を考慮してドキュメントを作成します。



取扱説明書では伝えるべき情報を網羅することが不可欠ですが、とくに暮らしに身近な製品では一般ユーザーに分かりやすいことが重要なポイントになります。

そのため、複雑な操作については、ともすれば文字だらけになりがちな説明文も図表化やリスト化を含めて検討し、テキストはできる限り簡潔に記載。あわせて写真やイラストを適切に配置し、見やすさにこだわったデザイン・レイアウトを施します。

こうしたさまざまな工夫によりページをスリム化することで、ユーザーが手に取りやすい、“活用される”取扱説明書につながると考えています。

海外メーカー品でも法規制に配慮

一方で、正確なコンテンツづくりを支えているのが、当研究室の実務を生かした安全表示等のチェックです。景品表示法をはじめ関連する法規制に照らして製品の注意表示や広告文に不適切な表現がないかを確認します。

例えば、海外メーカーの製品を日本国内で販売したい場合、あるいは自社ではマニュアルの作り方が分からない場合など、性能評価から取扱説明書制作まで一貫したサポートが可能です。また納品後は製品のリニューアルに伴う情報更新や調整などのメンテンスにも随時対応しています。

このほか、クライアントが保有する実験データを活用して販促物を制作する場合は、訴求内容の実証データとして十分であるかを、景品表示法上のリスクを含めて検討します。また景品表示法に基づく実証データがない場合、販促に使う素材だけを制作してほしいという場合には、訴求したい内容に応じた試験項目を提案するほか、試験を実施することも可能です。もちろん法規制に配慮しながら原稿作成も行います。

めざすのは“活用される”取説”づくり

生活科学研究室公式アカウントを設定

皆さまに当研究室の業務内容をより広く知っていただけるよう、この度、SNS上に公式アカウントを作成しました。現在、YouTubeに空気清浄機試験の概要動画を掲載していますので、ぜひ、一度ご覧ください。

【YouTube 公式アカウント】
https://www.youtube.com/channel/UCckiTKvEPEVqeyJ9V0ybVXw

【取扱説明書制作のご案内】
https://www.fcg-r.co.jp/pdf/lab/service5.pdf

見えない世界に性能の秘密あり

規格試験では分からない空気清浄機の性能を見極める

暮らしの科学部　生活科学研究室　石賀 浩

生活科学研究室では日本電機工業会のJEM1467規格に基づいた空気清浄機の性能評価を長年に渡り実施してきました。近年の新機能の追加などに伴い、規格に決められていない指標での評価も必要なのではと検討しています。幾つかの評価方法をご紹介します。

集じん性能で評価されていないこと

空気清浄機に求められる性能として室内に漂うホコリ、花粉、タバコ粒子などの微細な粒子を捕集して室内環境を整えることがあります。一般的には内蔵した送風機で室内の空気を循環させて内部フィルターで捕集する仕組みです。このため、送り出す風量に集じん性能は依存しています。一般的に大きな機体のものは風量が大きくなります。

写真1：風速計

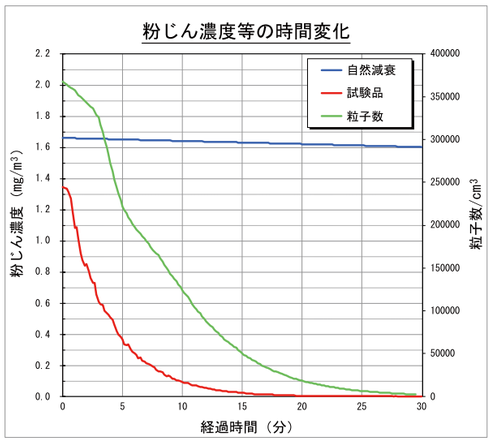
風量を測定するには正式には風洞実験をしなければなりませんが、送風口の風速分布を細かく測定し、面積から風量の目安を算出できます。集じん性能はこの大小とフィルターの性能などと相関があります。同じ集じん性能であっても、風量の違いを測定することで機体の隠れた性能の一面が分かります。

JEM1467規格では実験室に浮遊する粉じん濃度の変化で集じん性能を測定します。0.3μmの粒径の粒子が測定できる粉じん計を用いて粉じん濃度の測定を行うように定められています。この場合の粉じん濃度の単位はmg/m^3であり、単位体積に含まれる粉じん重量を測定しています。

従ってJEM1467の規格では粉じんの粒径による捕集効率の測定は考慮されていません。

大きめの粒子はフィルターで捕集され易いのは明らかです。一方、この試験で使用するタバコの主流煙の粒径は0.1μmをピークに分布すると報告されていて、PM2.5（2.5μm）等よりもずっと小さな粒子になります。（※主流煙とはタバコの燃焼箇所から直接外部に発煙しているもの。タバコの吸引でフィルター等のタバコ内部を通過した煙は副流煙と呼ばれ、粒径ピークは0.3μmと報告されています。）このような極めて小さい粒子が捕集されているかは粒径範囲を分けて、その範囲の粒子数をカウントできるパーティクルカウンターを併用することにより確認出来ます。

JEM1467規格の試験データと同時に測定したパーティクルカウンターの結果をグラフ1に示しました。JEM1467の規格で評価される時間（赤線）よりも、小さな粒子の除去には長い時間（緑線）が掛かることが分かります（粒子数は0.02～1μmの粒径粒子の個数/cm^3）。



グラフ1：粉じん濃度等の時間変化

重量は体積に比例すると考えられますので、粒径の3乗に比例します。粒径が10倍違うと重量としては1000倍の違いが生じます。従って、極めて小さい粒子は重量へほぼ影響しませんから、残留していてもJEM1467規格の集じん性能には反映されにくいと言えます。粒径が1μm以上の比較的に大きめの粒子を捕集することが出来れば、微小な粒子が大量に残留していたとしても、重量としてはほぼ捕集されたことになります。これがグラフ1の時間差になって表れています。そして粒径が小さい粒子ほどフィルターで捕集することは困難であり、捕集できない微小な粒子が一定数は浮遊し続けることを示しています。ウイルスの大きさを考えると0.1μm以下のナノレベル粒子の測定まで、近い将来に求められるようになるかもしれません。

清浄効果が及ぶ範囲を可視化する

空気清浄機の近傍と遠い場所ではその効果も変わります。それは室内の空気が空気清浄機により、どのように動かされるかによります。空気の流れを測定することは気流の可視化で行えます。空気と比重が同じ煙を発生させて煙の動きをレーザーの散乱光で確認します。気流は複雑で速いので高速カメラで撮影して微小時間の変化を追跡し解析します。

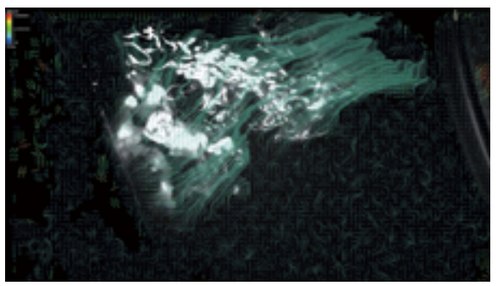


写真2：流速解析画像

特定の場所で空気の流れ方と速度が画像解析することにより分かります。

室内で空気の流れが悪く、他の場所との空気の循環がないと空気清浄機による清浄効果が及ぶのに時間が掛かることになります。

1台のカメラでは撮影出来る範囲が限られますが、2台のカメラを使うことでより広い範囲を同期して撮影することも可能です。これを部屋の各所で行えば、空気清浄機が室内に作る気流を可視化し、数値化することが出来ます。

瞬間を多角的に捉えてわかることがある

2台の高速カメラによる同期撮影は気流の可視化に留まらず、通常では確認出来ない一瞬の現象を解析することが出来ます。例として、水風船の破裂する瞬間を2方向から撮影した様子を紹介します。

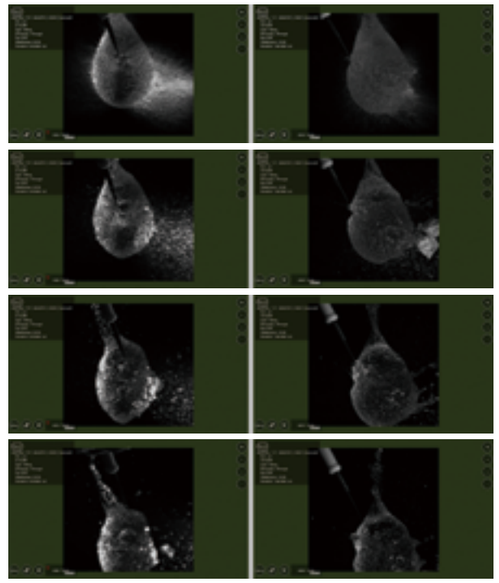


写真3：2方向からの同期撮影（1500fps）

例えば空気清浄機の回転軸から異音がする場合に2方向から撮影することで、軸にどのような振動が生じているかの解明に役立ちます。

生活科学研究室では多様な方法で規格試験のない製品評価でもご提案できます。お問い合わせは下記のWebサイトから承っています。

【お問い合わせ】
https://www.fcg-r.co.jp/lab/contact/index.html

美容・健康・料理研究室

商品の実力、見える化します！ ～化粧品・美容機器の性能評価～

暮らしの科学部　美容・健康・料理研究室　美容・健康部門　野積 宏子

美容・健康部門は化粧品や美容機器などの評価を行う研究室です。主な業務として、皮膚計測とオリジナルの化粧品の評価を行っています。

肌状態を数値化する

化粧品や美容機器などの肌への有効性を評価する皮膚計測を実施しています。温湿度の管理が可能な試験室を備え、研究用の機器を用い、測定は1名からご要望に応じて承ります。

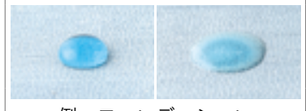
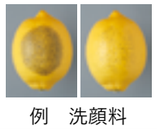
評価例

評価項目	測定内容
保湿評価	試験品使用前後に角層水分量（Corneometer® CM825、SKICON-200EX）を測定。長期連用だけでなく、単回使用時の経時変化をみることも可能です。
ハリ評価	試験品連用前後に皮膚粘弾性（Cutometer® MPA580）を測定します。
皮膚色評価	分光測色計（CM-2600d）にて肌色を計測します。L*a*b*やマンセルなどの表色系をお選び頂けます。
皮膚画像解析	VISIA® Evolutionで顔の撮影を行い、シワ・きめ・毛穴・紫外線シミなどを数値化します。長期連用はもちろん、ファンデーションなどの化粧もちを検証することも可能です。

化粧品の特長をビジュアル化する

美容雑誌「VOCE」（講談社）で当研究室が評価を担当する化粧品比較の企画「実験VOCE」がスタートしたのは1999年です。商品特長をビジュアルで示すというユニークな手法で、現在も連載が継続しております。同じ評価をご希望の化粧品で実施することが可能です。商品PR、営業ツールなどにご活用ください。

評価例

評価項目	評価内容
保湿	梅に化粧品を塗布し、経時でのしぼみ具合を観察します。 例　クリーム
耐水性・耐油性	化粧品を塗布後、水、モデル皮脂を滴下します。  例　ファンデーション
洗浄力	レモンに汚れを塗布し、洗浄後の落ち具合を観察します。  例　洗顔料

ご紹介した評価以外にも試験を行っております。お気軽にご相談ください。

【皮膚計測・化粧品のモデル評価のご案内】
https://www.fcg-r.co.jp/pdf/lab/service2.pdf

美容・健康・料理研究室

産経新聞料理制作のノウハウを生かします

暮らしの科学部　美容・健康・料理研究室　食品・料理部門　小松 あき子

食品・料理部門では、産経新聞料理面のレシピ提供をはじめ、オリジナルレシピの開発や作成、キッチンスタジオのレンタルも行っています。

産経新聞料理面のレシピを作成

食品料理部門では産経新聞にオリジナルレシピを提供しています。提供開始から約30年、レシピ数は約20,000点以上となりました。

ご好評頂いているお菓子レシピをはじめ、ご飯や麺類、パンなどを使った「主食のレシピ」、近年スーパーに出回り始めた食材を使用した「気になる食材のレシピ」など、毎年曜日ごとにテーマを替えて作成しています。

今年度からの新しいテーマである「気になる食材のレシピ」は、新しい材料を使ってみたい、いつものメニューにアクセントを加えたいなど、読者の「チャレンジしたい」気持ちを受けて、料理の幅がより広がるようなレシピ作成を行っています。

毎日掲載されるものですので、飽きのこないレシピ構成や手間をかけすぎない調理方法を心掛けています。

掲載されたレシピはレンタルサービスとしてもご利用頂けます。

産経新聞料理面に掲載された料理の一例
素材や季節に合わせたスタイリングも好評です

オリジナルレシピの開発

お客様のご要望に合わせた食品や素材を使ったオリジナルレシピをご提案します。

レシピの試作・料理制作から撮影までをコーディネート。レシピ作成・調理、スタイリング、撮影まで各分野のプロフェッショナルが対応し、誌面やホームページへの掲載に最適な素材を提供します。また、ご要望に合わせてレシピのリード文などの原稿作成や栄養計算も承ります。

キッチンとスタジオを貸し切りで！

キッチンは家庭向けのシンクとガスコンロ、ガスオーブンを2基ずつ備えており、広くスペースをとっているので試作や試食を行いたい、調理と撮影が一緒に出来る場所を探しているなど、用途に応じてご利用いただくことも可能です。

また、キッチン使用時には調理器具や食器、カトラリーもお使い頂けます。

事前にキッチンを見学できますので、お気軽にお問い合わせください。

【キッチンスタジオのレンタルのご案内】
https://www.fcg-r.co.jp/pdf/lab/service3_2.pdf

IPM研究室

除菌・抗菌アイテムなどの性能評価

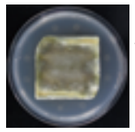
～IPM研究室のご案内　細菌・カビ・ウイルスの除去評価～

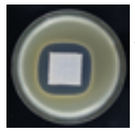
暮らしの科学部　IPM研究室　橋本 一浩

IPM研究室は、除菌アイテムの性能評価や、雑貨や家電などの微生物汚染調査を行っています。最近では、エアコン、洗濯機、掃除機など家電メーカーからの依頼を多くいただいています。また、住宅・美術館・公共施設など室内空間の汚染調査を行い、対策をアドバイスしています。

除菌・抗菌アイテムの性能評価（細菌・カビ・ウイルス）

① JISなど業界規格に基づいた方法で性能を評価。各種規格試験に対応可能です。
② 実際の住宅などで検証・試験し、現実に近いデータを取得します。


JIS Z 2911
カビ抵抗性試験


JIS L 1902
繊維製品の抗菌試験

住宅による検証試験の様子

空気清浄機や空間除菌剤の評価

① 日本電機工業会規格JEM1467「室内付着ウイルスに対する抑制性能評価試験」に基づいた方法で付着ウイルスの除去性能を評価。細菌やカビでも実施可能です（受託業務の一例として、本法による試験を次ページで紹介しています）。
② 日本空気清浄協会評価指針JACA No.50-2016に基づいた方法で浮遊細菌・カビの除去性能を評価します。

浮遊菌濃度の調査

エアーサンプラーにて室内空気中のカビ・細菌の濃度を測定し、基準値と比較（日本建築学会規準法に準拠）。カビは種類の同定も実施し、汚染原因を考察します。

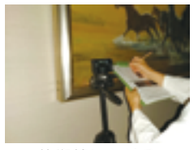
浮遊菌濃度の測定

物品や食品の微生物汚染検査

様々なモノに付着する微生物数を測定します。一般生菌数やカビ数等、各種選択培地を用いた分析や遺伝子解析による同定を実施します。

室内の微生物汚染調査と対策アドバイス

微生物検査、昆虫捕獲調査、温湿度の調査を定期的に行い、環境改善をアドバイスします。


美術館における
生物汚染調査

ハウスダストや物品のダニ分析

検体に含まれるダニを分析します。ELISA法によるアレルゲン蛋白の分析も可能です。

ハウスダストの採取

コナヒョウヒダニ

【微生物試験等のご案内】
https://www.fcg-r.co.jp/pdf/lab/service4.pdf

IPM研究室

【研究レポート】

JEM1467 附属書E「室内付着ウイルスに対する抑制性能評価試験」の実践例　―殺菌灯の場合―

暮らしの科学部　IPM研究室　橋本 一浩

付着ウイルスを除去する製品の評価法として、日本電機工業会規格JEM1467 附属書 E：付着ウイルス抑制試験が広く実施されています。本項では、殺菌灯（紫外線ランプ）を試験品として、この方法を実施し、試験手順を解説します。また殺菌灯の効果について考察します。

はじめに

室内空間を除菌することを目的とした製品は数多く存在します。代表的なのは、空気清浄機と空間除菌剤でしょう。空気清浄機はフィルターで空気をろ過して浮遊微生物を除去することを得意としています。空間除菌剤は薬剤などを散布し、壁や机などの物品に付着する微生物を殺すことを得意としています。こうした製品の除菌力を評価する試験法は複数存在しますが、大きく2つに分類することができます。①空気中を浮遊する微生物を除去する試験。②モノに付着する微生物を除去する試験。浮遊菌除去とモノ付着菌除去、どちらを得意とする製品かで試験方法の選択肢が変わってきます。例えば、除菌機能としてHEPAフィルターのみを搭載しているタイプの空気清浄機は、モノに付着する微生物を除去する能力はないので、①浮遊微生物試験のみを実施することになります。

JEM1467：付着ウイルス除去試験の手順

本項では、②モノに付着する微生物を除去する試験の方法についてご紹介します。②の代表的な方法として、「日本電機工業会規格JEM1467家庭用空気清浄機 附属書 E：室内付着ウイルスに対する抑制性能評価試験」があります。この試験では、布やプラスチックの表面に付着するウイルスへの効果を調べます。細菌やカビに対するエビデンスを取得したい場合には、使用する微生物を細菌やカビに変更した応用法として実施されています。

実際にこの試験法を用いて、除菌製品の性能を評価してみました。今回、試験品としたのは、「殺菌灯（紫外線ランプ）」です。殺菌灯から照射される紫外線は生物にとって有害な光線であり、ウイルス・細菌・カビといったあらゆる微生物を死滅させます。

試験は弊社の実験室（約21.8m^3）で実施し、手順はJEM1467付属書Eの方法に準じました。使用したウイルスは、大腸菌ファージϕX174です。これは細菌（大腸菌）に感染するウイルス（学界ではファージと呼ばれる）で人への病原性はありません。今回は、シャーレ（プラスチック製）の表面にウイルスを塗布し、そこに紫外線を照射して、ウイルスがどの程度死滅するかを測定しました。殺菌灯は最も殺菌力が強いとされる波長254nm（UV-C領域）の紫外線を照射するGL-15形のランプを使用しました（図1）。

図1　試験品として用いた殺菌灯
※2本に見えるが1本は鏡面反射

殺菌灯の設置個所はJEM1467を参考に、実験室の壁際とし、高さ70cmの位置から部屋中央に向かって照射されるよう取り付けました。ウイルス付シャーレは、殺菌灯からの直線距離が150cmになる位置に設置しました（図2）。

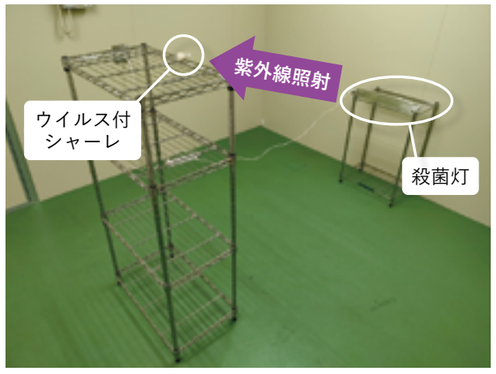


図2　実験室の様子
殺菌灯とシャーレの位置関係

単に照射するだけではなく、今回はシャーレの置き方を2パターン設定して検証をしました。一つは紫外線を直射するパターン（図3左：ウイルス塗布面を殺菌灯に向ける）、もう一つはシャーレを裏返して死角にするパターン（図3右：殺菌灯とウイルスの間に障害物としてシャーレの底が存在する）としました。

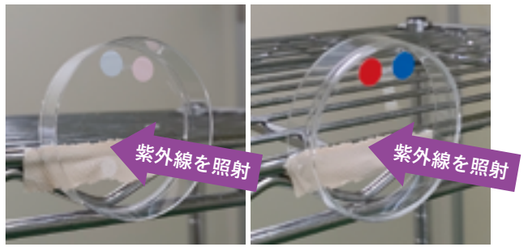


図3　ウイルス付着シャーレ
左：直射パターン　右：死角パターン

2パターン同時に設置して殺菌灯をonにし、15分・60分が経過するごとにシャーレを回収して、シャーレ表面で生き残っているウイルスの数を計測しました。JEM1467では、ファージの場合は「プラーク法」という培養方法でウイルス数を計測します。また、JEM1467では除菌装置を稼働していない状態「自然減衰」も測定すると定められています。今回は、殺菌灯を消灯した状態を「自然減衰」とし、暗闇の実験室に15分・60分置いただけのウイルス付シャーレも測定を行いました。

結果：殺菌灯のウイルス除去能力

シャーレ1枚あたりの生存ウイルス数（感染価：単位はpfu/枚）をグラフに示しました（図4）。初期（0分）では100万（pfu/枚）だったウイルス数が、時間経過とともに減少していく様子が判ります。

紫外線を直射したシャーレでは、生存ウイルス数が大きく減少しており、15分後には99.9%が死滅していました（図4の橙）。JEM1467では、99%以上減少させることが出来れば「除去効果あり」と判断するので、殺菌灯の性能は合格レベルにあると言えます。ただし、シャーレを裏返して死角にしたパターンでは、死滅速度が遅く15分で36%減少、60分が経過しても40%減少に留まっていました（図4の緑）。目標値の99%にほど遠く、あまり効果がないと言っていいでしょう。この結果は、殺菌灯の有効範囲が、紫外線光の当たる部分に限定されることを示しています。影になる部分にはほとんど効果がないのです。

なお、何もしていない「自然減衰」も減少していますが、これは乾燥によってウイルスが少しずつ死滅しているためです（図4の水色）。JEM1467では、除菌製品稼働時の測定のみでは不十分で、必ず自然減衰も測定する必要があり、自然減衰した分を差し引いた数値を「減少率」と定義しています。

殺菌灯に近いほど効果が高まる（追加検証）

ところで、筆者は上記の結果を見て「150cmでは距離が遠くて効果が十分に発揮されていない」と感じました。そこで、殺菌灯とシャーレをもう少し接近させて再度、照射してみることにします。今度は紫外線からシャーレまでの距離を50cmと150cmの2パターンに設定しました。照射時間は短めにし、30秒・1分・2分としました。短時間の試験なので自然減衰の測定は省略しました。

結果、50cmではより強力な殺菌効果が得られ、30秒の時点で99.8%減少し、1分で限界値の99.99%を超えました（図5の赤）。一方、150cmではやはり減少速度は遅く、30秒で60%減少、1分でも75%減少に留まっていました（図5の橙）。この結果から、殺菌灯からの距離が近ければ近いほど、高い効果が得られると言えます。

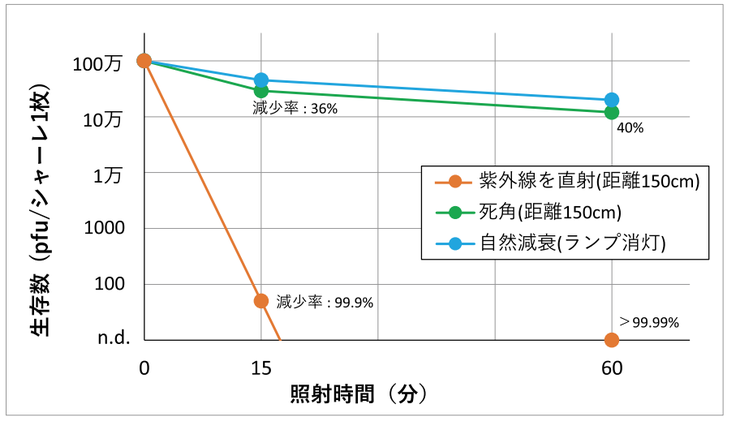


図4　ウイルス（ϕX174）の生存数（感染価）。減少率は自然減衰に対して減少した割合として計算した。減少率は広告などで見かける「除菌率」と同義。

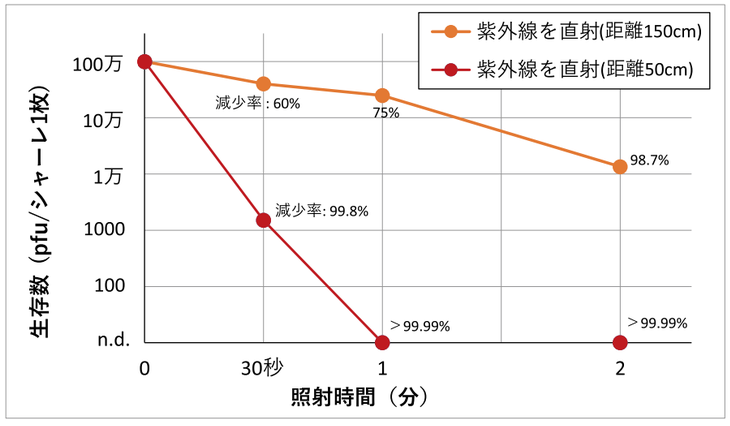


図5　紫外線の照射距離を変更して再度、ウイルス（ϕX174）の生存数（感染価）を測定。いずれもウイルス塗布面に紫外線を直射した。減少率は初期値（0分）に対して減少した割合として計算した。

おわりに

本稿のように、JEM1467付属書E：付着ウイルス試験の方法に当てはめて評価した場合、殺菌灯のウイルス除去効果は有効であると判断できました。多くの空間除菌剤は99%を達成するのに数時間、あるいは数日単位を要します。これに比較すると、殺菌灯は数分の単位で効果が得られており、非常に有効な除菌アイテムであると言えます。そのため、微生物実験で利用する空間の殺菌手段として、殺菌灯が導入されています。今回、試験を行った弊社の実験室も、消毒の際には殺菌灯を利用しています。

ただし、殺菌灯を有効に使うには少しコツが要ることも今回の実験で判りました。間違えた使い方をすると、効果が得られません。最後に、殺菌灯を使う上で大事なポイントを以下にまとめておきます。

① 紫外線が直射されるよう、整理整頓し死角を無くす。
② 有効範囲は殺菌灯からせいぜい2～3m以内と考える。
③ 紫外線は人体さえも破壊するので、人に向かって照射してはいけない。

実際の現場で殺菌灯を利用する場合に心がけると良いでしょう。理容室の紫外線消毒器を例に挙げれば、ハサミやクシが重ならないように置くことが重要です。紫外線消毒器はごく狭い空間なので、確実に照射できれば非常に高い効果が期待できるでしょう。

本稿を読まれた方は是非参考にしていただければ幸いです。

企画開発部

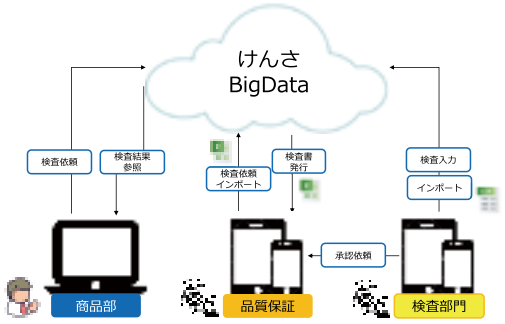
【近日リリース！】
検査業務のDX化を推進！

食品の微生物検査は商品の「安心/安全」を担保するために必須です。検査結果はその他にも、賞味期限の設定、クレーム対応、商品の品質管理などに使用される社内の重要なデータです。

検査業務はアナログな管理が多く、手書きで検査一覧表を作り、結果を記入、その紙を基に報告書を作成し回覧/承認を経てキャビネットなどに保管されます。過去のデータが見たい場合は探す手間がかかりますし、検査結果を集計する場合は表計算ソフトに再入力する必要もあります。重要なデータにも関わらず、管理方法に課題が残ります。

これら課題を解決すべく、「検査業務管理ソフト」の新規開発を進めています。このソフトでは上記検査業務の記録･保管･閲覧･解析をすべてクラウド上で行えます。

賞味期限の検討や新商品のレシピの変更/提案、製造時期による微生物検査結果の比較など、検査業務外でも活用が見込まれます。



フジサンケイ危機管理研究室

マスコミグループの提供する
危機管理研修プログラム

弊社は日本最大級のメディア・コングロマリットであるフジサンケイグループのシンクタンクとして、民間企業、大学・団体等に対してマスコミ対応を含めた危機管理トレーニング・プログラムを提供しています。

今日、様々な組織がマスコミなどを通じてステークホルダーに説明責任を果たすことが求められています。弊社の「メディアトレーニング」では、報道する立場の現役幹部記者が、対外的なコメントや意見を述べる立場の方々にインタビューや記者会見などメディア対応のスキルを伝授しています。

トレーニング内容は、経営トップ向けから幹部・一般職員向けまで、ご要望に応じて組み立てをいたします。近年、ご依頼が多いのが不祥事会見を想定したプログラムです。模擬会見での現役の幹部記者との質疑応答を通じて、マスコミ対応の基本と日ごろから備えておくべき組織態勢などを体得してもらうというものです。転ばぬ先の杖としてぜひご活用ください。

テレビカメラクルーも入った模擬会見の模様

FCG LABO
暮らしの科学部 特集号
vol. 29 | 2022

株式会社 エフシージー総合研究所
FCG Research Institute, Inc.
〒135-0064　東京都江東区青海1丁目1番20号 ダイバーシティ東京オフィスタワー6階
Tel：03-6891-8500（代表・管理部）
［発行］2022年10月14日（vol. 29）　［発行人］岸本 一朗　［編集人］樋口 教行

［お問い合わせ］
https://www.fcg-r.co.jp/

FCG LABO vol.28
「企画開発部・フジサンケイ危機管理研究室 特集号」
はこちらよりご覧ください。

本紙記事・写真・イラストの無断転載を禁じます。